

第4章 北海道がめざすもの

1 将来像

遺跡でつながる新たな価値創造空間、北海道

縄文時代の人々は、一万年以上もの長い年月のなか、環境変化に巧みに適応しながら、狩猟・漁労・採集を基盤に自然と向きあい、持続可能なライフスタイルを実現しました。また、本州が稲作を基盤とした弥生文化に移行した後も、北海道に暮らした人々は縄文的な暮らしを守り続けました。

近年、地球環境を保全し、多様性と包摂性のある国際社会の実現に向けた取組が広がるなか、厳しくも豊かな北海道の自然のなかで育まれた「北海道の縄文」の価値に光を当て、その価値を「ストーリー」として紡ぎ、訪れる多くの人々に共感や感動を与えられるよう資源として磨きあげることで、新たな「価値」を創造し、地域に交流と賑わいを創出していくことをめざします。

[将来像の実現イメージ]

■価値の保全

「北海道の縄文」の価値が広く道民に浸透し、縄文時代の人々が暮らした遺跡は、地域の誇りやアイデンティティとして認識され、遺跡周辺の豊かな自然環境とともに、コミュニティ全体で大切に守られています。

■価値の継承

遺跡には、地域の学校はもとより、道内、国内から教育旅行で訪れている多くの子どもたちの姿が見られます。子どもたちは、地域住民が中心となったガイドによる解説を興味深く聴き、スタッフも生き生きとしています。

■価値の普及

「こんなに寒い地域で、どのように生活していたのだろうか？」などといった誰もが感じる疑問に答えてくれる、豊富な知識をもったガイドによるツアーや、当時の自然環境や人々の生活を楽しく追体験出来るプログラムが好評です。

■価値の共有

「北海道の縄文」は、世界遺産登録後、これまで以上にその関心が高まり、遺跡の価値が改めて認識・共有されるとともに、地元食材を活かした「食」や地域の特色を組み合わせた様々なサービスも充実するなど、遺跡周辺地域は、国内外から来訪する人々で賑わっています。

■創造と発展

来訪者に向けた様々なサービスは、地域に新しい生業を生み出し始めており、こうした取組は、地域の人々により主導され、行政との連携のもと遺跡の保存と活用が相乗効果を生み出す好循環の仕組みが構築されています。

2 キャッチフレーズ

未来へつづく、一万年ストーリー。

「北海道の縄文」の活用を進め、将来像を実現するためには、何よりも地域住民や遺跡を訪れる人々に価値や魅力を伝え、取組への参加や来訪者からの発信を増やし、大きなうねりとしていくことが必要です。

そのため、「北海道の縄文」の魅力を誰もが理解でき、さらに、惹きつけるコトバとして上記キャッチフレーズを設定し、道民はもとより国内外の多くの人々に向けた発信の場面で常に使用することとします。

なお、取組に応じて下記のフレーズ等とも組み合わせて発信します。

Wow! 知れば知るほど、ディープ・・・

私たちの原点。縄文人の奇跡。

解くのは、あなただ。縄文ミステリー。

ちょっとステキかも。
縄文ライフスタイル。

私たちの300代前の祖先に会おう。

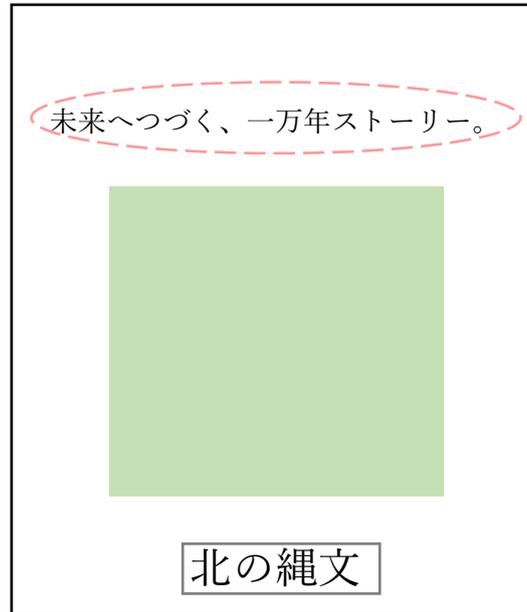
なぜ、こんなにも世界が驚いたのか？

北海道の、ロングロングヒストリー。

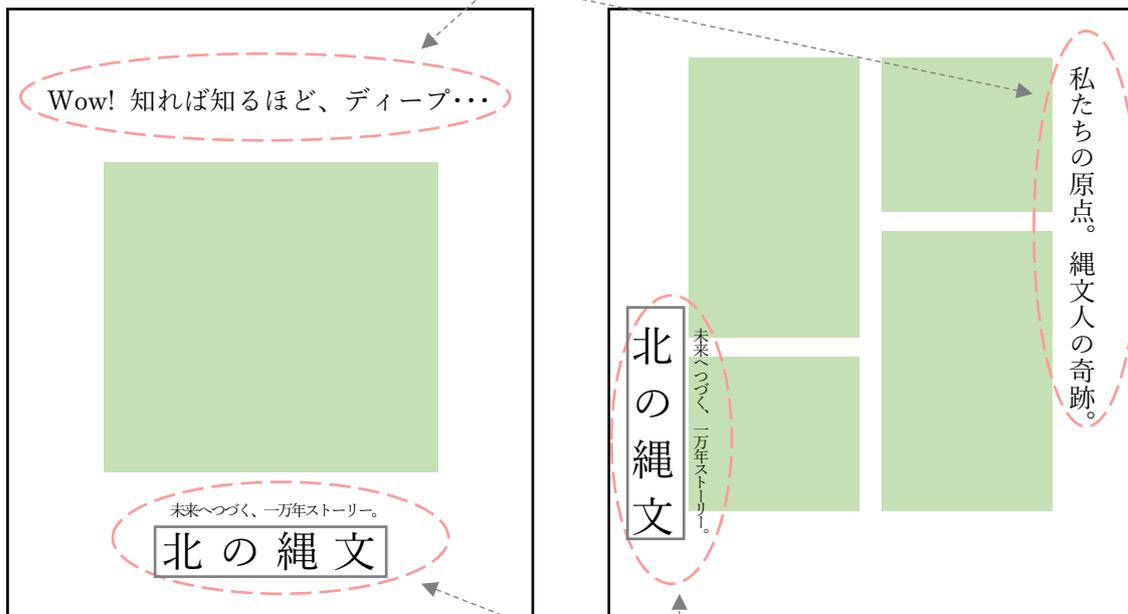
発見。未来社会へのカギ。

[キャッチフレーズの使用イメージ]（例：ポスター）

- ① 展開の初期は「未来へつづく、一万年ストーリー。」をメインで使用。



- ② 取組に応じて、その他のフレーズとも組み合わせて使用していく。



- ③ 「北海道の縄文」であることがわかる ロゴ（北の縄文など）と必ずセットで使用する。

3 各主体の役割と基本的な姿勢

将来像の実現には、これまで「北海道の縄文」を守り、その価値を継承してきた地域の人々をはじめ、行政や民間事業者など多様な主体が、めざすべき方向性を共有し、それぞれの役割を補完しあうことによって取組を進めていくことが重要となります。また、北海道全体で一体感のある取組を展開するためには、以下の3つの基本姿勢を共有しながら進めていくことが大切です。

【各主体に期待される役割（機能）】

- 北海道 北海道全体の取組を一体的に進めるための総合的な戦略のもと、普及啓発や情報発信を行うとともに、地域の取組が円滑に進むよう連携の場を構築し、将来的に「北海道の縄文」を活かした取組の中核を担う組織（以下、「中核組織」という。）の育成やサポートを行います。
- 市町村 各遺跡の保存活用を地域住民や地域の活動団体、民間事業者等と連携して進めます。
- 地域住民・道及び市町村と連携した保存活用に取り組むことや、新たな価値を創造
地域の活動団体 していく担い手となることが期待されます。
- 民間事業者 自らの得意分野等において各主体と連携し、遺跡の保存活用や新たな価値を創造する取組への参画が期待されます。

【3つの基本姿勢】

〔基本姿勢1〕 地域が主体

これまで「北海道の縄文」を守ってきた「地域の人」が主役となり、コミュニティを再生することで、自らが賑わいの創出に携わることが大切です。

〔基本姿勢2〕 来訪者視点の意識

「北海道の縄文」の価値を「正しく」伝えることはもとより、来訪者に感動と共感を伝えられる取組であるかを意識することが大切です。

〔基本姿勢3〕 持続可能な仕組みづくり

「保存」と「活用」が相乗効果を生み出し、将来にわたり持続可能な取組となる仕組みづくりが大切です。

第5章 戦略と施策の展開

1 戦略の視点

北海道における世界遺産登録後の活用に向けては、これまでも構成資産所在市町による取組が中心となって進められており、それぞれの取組は「北海道の縄文」の活用のベースを担うものとして、極めて重要です。

一方で、世界遺産登録後は、将来像を実現し地域に交流と賑わいを創出していくため、北海道を訪れる人々に対し「北海道の縄文」の価値や魅力を一体的に伝えていくことが必要となります。

「北海道の縄文」を活かしたこれからの取組は、地域的な視点と広域的な視点という2つの視点の必要性を各主体が共有するとともに、統一的なマネジメントのもとで各々の状況や立場に応じて戦略的に進めていくこと（以下、それぞれ「地域戦略」、「広域戦略」という。）が重要となります。

2 戦略の進め方

地域戦略と広域戦略を、各主体がそれぞれの現状に応じて段階的に進めることも重要です。

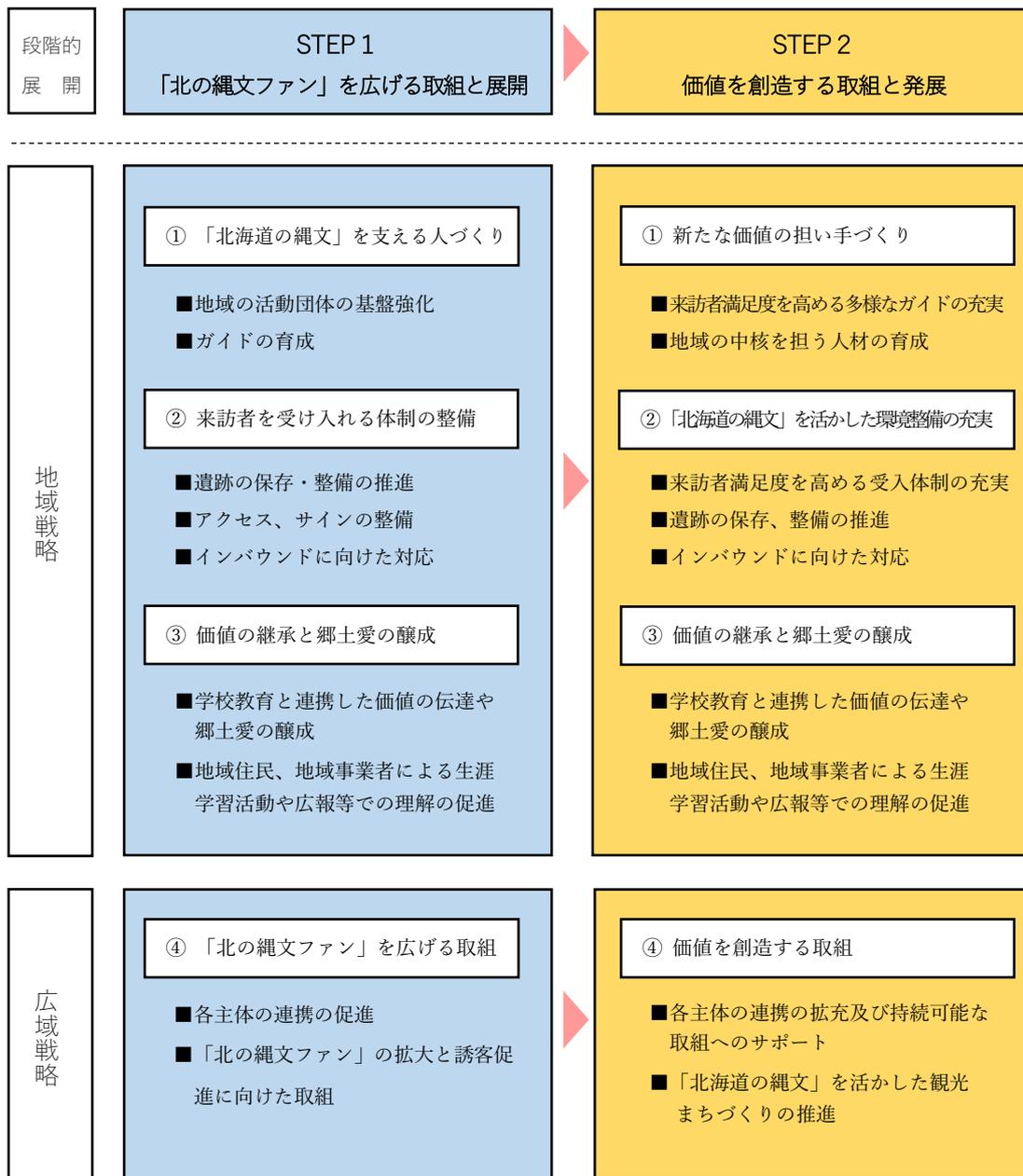
北海道が現在置かれている「地域の活動団体の活力低下」や「統一的な情報発信の不足」という課題を鑑み、基盤づくりや戦略の基礎となるストーリー構築を進める「STEP 1 『北の縄文ファン』を広げる取組と展開」から、STEP 1 の取組を充実・発展させた「STEP 2 価値を創造する取組と発展」へと段階的に展開していくことによって、将来像の実現をめざします。

なお、STEP 1 については概ね3年間を目標期間とし、取組の進捗に応じてSTEP 2 に移行し、その充実・発展的な取組の展開を図ることとします。



3 施策の展開

「戦略の視点」及び「戦略の進め方」に基づき、各STEPでの目標及び施策展開の方向性を示します。また、将来像の実現に向け各主体がそれぞれの役割や状況に応じて取組を進めていくための施策を取組例として示します。



（1）STEP1 「北の縄文ファン」を広げる取組と展開

【目標】

各主体の連携のもと、「北海道の縄文」の価値や魅力を「北の縄文ストーリー」として構築し、「北の縄文ファン」の拡大を図ります。また、「北海道の縄文」の価値に道民の気付きを起し、将来的に地域が主体となった取組につなげる基盤を築くことをめざします。

[地域戦略]

① 「北海道の縄文」を支える人づくり

将来像の実現のためには何より遺跡を守り、価値や魅力を伝えていく“人”が大切です。これまで行政とともに、地域の遺跡を守り、その価値の継承に取り組んで来た地域の活動団体をサポートするとともに、世界遺産登録により増加が予想される来訪者に、「北海道の縄文」の価値や魅力を伝えるガイドの育成が喫緊の課題です。

■地域の活動団体の基盤強化

（主な取組例）

- ◇学校教育と連携し子どもの頃から縄文遺跡に触れる活動を通して、団体の将来を担う人材を確保
- ◇団体間の交流・連携を促進する情報交換会等の開催（現地での開催だけでなく、ICT技術を活用した形式での開催などについても検討）
- ◇地域で活動する異分野の団体との連携など、団体の活動を広くアピールする取組の実施
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報

■ガイドの育成

（主な取組例）

- ◇各地域でのガイド育成に向けた研修会の開催及び開催に向けたサポート
- ◇ターゲットに応じたガイドレベルの調整（世界遺産の価値の伝達や遺跡の特徴などを語る総合的ガイド、遺跡やその周辺の地域の魅力も併せて語る地域ガイド、など）
- ◇アドベンチャートラベルなど、海外からの来訪者に対応出来るプロガイドの育成に向けた検討
- ◇道内共通ガイドブックの作成や活用

② 来訪者を受け入れる体制の整備

世界遺産としての顕著な普遍的価値を次代へ継承するとともに、世界遺産登録を契機に増加が予想される国内外からの来訪者を適切に受け入れるための体制の整備が必要です。また、地域住民等の参加により遺跡周辺の環境保全を図っていくことも重要となります。

■遺跡の保存・整備の推進

（主な取組例）

- ◇「北海道・北東北の縄文遺跡群包括的保存管理計画」や各遺跡の保存活用計画等に基づく、適切な保存と管理
- ◇地域の活動団体等と連携した遺跡保護の活動
- ◇各遺跡の整備計画等に基づく、ガイダンス施設の整備や展示内容の充実
- ◇各主体が連携した遺跡周辺の環境保全の推進

■アクセス、サインの整備

（主な取組例）

- ◇移動手段に応じた経路情報など道内各遺跡へのアクセス情報を一体的に発信
- ◇自家用車やレンタカーなど、個人旅行に対応した遺跡までの確実な誘導を図るサインの充実
- ◇来訪者増加に対応する駐車場の確保及び駐車可能台数等の情報発信
- ◇自家用車以外の来訪を促す二次交通（タクシー、コミュニティバスなど）の充実
- ◇GPSやAR（拡張現実）技術等を活用した遺跡への来訪促進

■インバウンドに向けた対応

（主な取組例）

- ◇多言語に対応した統一的なホームページの整備
- ◇道内通訳案内士との連携や通訳案内士に向けた講習会等の実施
- ◇各遺跡やガイダンス施設等での多言語対応ガイドツール等の導入検討
- ◇二次元コードを活用した多言語解説への対応
- ◇ポストコロナを視野に入れた施設ごとの対応（消毒液、マスク等）はもとより、新たなインタープリテーションのあり方などを検討

③ 価値の継承と郷土愛の醸成

「北海道の縄文」の価値が親から子へ世代を越えて伝えられ、遺跡が地域に対する誇りや愛着を深める存在となることで、地域の人々が将来的な保存と活用の担い手となるよう、教育現場や地域の人々に向けた普及啓発が重要です。

また、こうした価値の継承を通じ、地域環境の保全や脱炭素社会に向けた環境

保全に関する意識の高揚を図ることも重要です。

■学校教育と連携した価値の伝達や郷土愛の醸成

（主な取組例）

- ◇小中学校に向けた「北海道の縄文」の学習参考教材の作成、配付
- ◇夏休み等を活用した子どもたちによる遺跡ガイド活動の実施
- ◇教職員に対する価値の伝達
- ◇教育旅行の誘致に向けた取組

■地域住民、地域事業者による生涯学習活動や広報等での理解の促進

（主な取組例）

- ◇「北海道の縄文」の価値や魅力をわかりやすいストーリーで伝える啓発物の作成、啓発
- ◇他の世界遺産における地域の取組事例の紹介などによる理解の促進
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報（①の再掲）
- ◇縄文文化の学びと連動した、生涯学習活動の促進

[広域戦略]

④ 「北の縄文ファン」を広げる取組

「北海道の縄文」の価値や魅力を、道民はもとより来訪者を惹きつけるストーリーとして構築し、地域の特色やターゲットに応じた戦略的な展開を進めることで、「北の縄文ファン」を広げることをめざします。

■各主体の連携の促進

（主な取組例）

- ◇各主体が連携する場（プラットフォームなど）の設置
- ◇統一的な情報発信
- ◇「縄文のまち連絡会」⁶と連携した道内縄文遺跡を活かす取組の検討
- ◇将来的な中核組織のあり方（地域連携 DMO など）の検討

■「北の縄文ファン」の拡大と誘客促進に向けた取組

（主な取組例）

- ◇来訪者を惹きつける「北海道の縄文」ならではのストーリーの構築
- ◇ストーリー及びキャッチフレーズ等を活かした「北海道の縄文」の価値・魅力の発信
- ◇道内外からの教育旅行の誘致による将来的なリピーター層への浸透
- ◇アドベンチャートラベル推進に向けた取組との連携

⁶ 「全道の縄文遺跡のあるまちが集い、共に協力しながら縄文に学び、縄文の知恵を活かしたまちづくり策を探る」ことを目的に、2010（平成22）年に設立。現在28市町が加盟（2020（令和2）年10月時点）。

（2）STEP 2 価値を創造する取組と発展

【目標】

STEP1の基本施策を充実・発展するとともに、広域戦略として地域住民が「北海道の縄文」の価値や魅力を活かし、地域コミュニティの再生や新たな生業を生み出すなど、地域に交流と賑わいを創出していくことをめざします。

[地域戦略]

① 新たな価値の担い手づくり

来訪者が縄文文化や遺跡だけでなく、遺跡のある地域のファンとなっていただくよう、来訪者の興味やニーズ（時間や見たいもの、体験したいものなど）に合わせた対応が出来る多様なガイドの充実をめざすことが重要です。

また、縄文遺跡を活かした取組を地域の人自身が積極的に参加し、地域の新しい価値を担っていく必要があります。

■来訪者満足度を高める多様なガイドの充実

（主な取組例）

- ◇アドベンチャートラベルの来訪者に対応出来る専門的ガイド（縄文文化以外の自然環境や地域の多様な観光資源等にも精通）の充実
- ◇まち歩きガイドなど、地域の魅力を伝えることの出来るガイドの充実

■地域の中核を担う人材の育成

（主な取組例）

- ◇地域の人自らが地域の縄文遺跡を活用した取組の担い手となるよう、地域での自主的な研修会の開催等をサポート

② 「北海道の縄文」を活かした環境整備の充実

「北の縄文ファン」となった人々の地域への滞在を増やし、来訪の満足度を高めるため、先端技術の活用による案内の充実や楽しみながら縄文文化を知り、体験できる環境の整備をめざすことが重要です。

■来訪者満足度を高める受入体制の充実

（主な取組例）

- ◇先端技術の活用やコンテンツ作成（遺跡でのプロジェクションマッピングや三次元計測による出土品等の三次元モデル化やレプリカの製作など
- ◇景観に配慮したサインの整備、充実
- ◇調査研究、情報発信の拠点の形成
- ◇滞在時間の充実を図る体験プログラムの充実

■遺跡の保存・整備の推進（STEP1の継続）

（主な取組例）

- ◇「北海道・北東北の縄文遺跡群包括的保存管理計画」や各遺跡の保存活用計画等に基づく、適切な保存と管理
- ◇地域の活動団体等と連携した遺跡保護の活動
- ◇各遺跡の整備計画等に基づく、ガイダンス施設の整備や展示内容の充実
- ◇各主体が連携した遺跡周辺の環境保全の推進

■インバウンドに向けた対応（STEP1の継続）

（主な取組例）

- ◇多言語に対応した統一的なホームページの整備
- ◇道内通訳案内士との連携や通訳案内士に向けた講習会等の実施
- ◇各遺跡やガイダンス施設等での多言語対応ガイドツール等の導入検討
- ◇二次元コードを活用した多言語解説への対応
- ◇ポストコロナを視野に入れた施設ごとの対応（消毒液、マスク等）はもとより、新たなインタープリテーションのあり方などを検討

③ 価値の継承と郷土愛の醸成

STEP 1の取組を継続し、保存と活用の担い手として地域の人々の参画を促すため、学校現場や地域の人々に向けた普及啓発を行うことが必要です。

学校教育との連携を深めるため、現場の教師が活用しやすいコンテンツの作成等を進めるとともに、地域の住民や事業者が縄文を活かした取組に関わる機会を増やしていくことが欠かせません。

■学校教育と連携した価値の伝達や郷土愛の醸成

（主な取組例）

- ◇教育現場で普及が進むタブレット端末等で活用出来るコンテンツの作成
- ◇小中学校に向けた「北海道の縄文」の学習参考教材の作成、配付(STEP1の継続)
- ◇夏休み等を活用した子どもたちによる遺跡ガイド活動の実施(STEP1の継続)
- ◇教職員に対する価値の伝達(STEP1の継続)

■地域住民、地域事業者による生涯学習活動や広報等での理解の促進（STEP1 の継続）

（主な取組例）

- ◇「北海道の縄文」の価値や魅力をわかりやすいストーリーで伝える啓発物の作成、啓発
- ◇他の世界遺産における地域の取組事例の紹介などによる理解の促進
- ◇イベント風景など、遺跡での取組に携わる「人」を中心とした動画の作成及び動画を活用した地域住民、事業者に向けた広報
- ◇縄文文化の学びと連動した、生涯学習活動の促進

[広域戦略]

④ 価値を創造する取組

STEP 1 の取組により「北の縄文ファン」が拡大し、地域への来訪者の増加や滞在時間が延びることで、地域への関心の高まりが期待されます。これらの人々に地域のファンになっていただくとともに、地域の人自身が「北海道の縄文」を活かした取組の中核を担い、新たな価値として創造し、地域の賑わいの創出につなげていくことをめざします。

■各主体の連携の拡充及び持続可能な取組へのサポート

（主な取組例）

- ◇観光等他分野の組織等との連携促進
- ◇中核組織による取組へのサポート

■「北海道の縄文」を活かした観光まちづくりの推進

（主な取組例）

- ◇観光事業者等との連携の強化
- ◇地域の多様な資源と連携した周遊コンテンツの開発
- ◇地域の中核を担う人材の育成（地域戦略①との連携）
- ◇地域資源を活かした国際会議等の誘致
- ◇自然と共生する持続可能な縄文ライフスタイルを活かした新たな誘客

4 工程



第6章 将来像の実現に向けて

将来像の実現に向け、各主体がそれぞれの役割に応じて、また、相互に連携して取組を進めることが重要である一方、これらの取組を持続的に推進していく体制の構築も必要です。

1 各主体の連携と推進体制のあり方

体制の構築については段階的に進めることが必要であり、STEP 1では、各主体が参画する連携の場（プラットフォームなど）を構築し、具体的な取組内容の企画・実施を推進します。

将来的には、中核組織が、行政をはじめとした各主体のサポートのもと、事業内容の充実や人材の育成、マーケティングに基づく情報受発信や滞在プログラムの提供など、「北海道の縄文」を活かした観光まちづくりを一体的に担っていくことが望まれます。

2 中核となる人材のあり方

持続可能な体制を構築していくにあたり、最も重要な位置を占めるのは、組織を導く中核的な人材の存在です。各主体と円滑に連携することはもとより、地域が守り継承してきた縄文遺跡の価値や支えてきた人々の想いを大切にし、将来にわたって「北海道の縄文」を活かした取組を地域とともに持続的に進めていくという想いを持った人材が担い手となることが重要です。

3 持続可能な運営のあり方

持続可能な取組のためには、推進体制や人材だけでなく運営資金を確保する仕組みも重要となります。

特に、来訪者の満足度を高め、保存と活用の双方が相乗効果を生み出していくためには、持続可能な運営の仕組みを確立することが重要であり、体験型ふるさと納税等の行政からの資金や地域活性化ファンド等からの投資、コンセッション方式の導入など多様な資金調達や運営手法について検討していく必要があります。